

保育者のとらえる子どもとの信頼感

岡本かおり¹⁾
(2015年1月5日受理)

Early Childhood Education and Care Teachers' Feelings of Trust in Children

Kaori OKAMOTO

This study focused on how early childhood education and care (ECEC) teachers view their students' trust and also examined the overall state of child care in Japan. I interviewed 10 kindergarten teachers and 10 nursery school teachers. For instance, one kindergarten teacher said, "A girl kept crying in the morning, but now she began favorite play by my sign." Another teacher said, "A girl had been just crying without telling her feelings, but she became to speak up to me willingly. When I hold her hand, she also squeezed my hand back." Some another said, "A shy boy was able to express his somewhat selfish will." The results showed that the language and conduct of children changed when dealing with ECEC teachers; those teachers felt that they achieved a sense of acceptance among the students and that mutual understanding existed, that is, the teachers believed that there was mutual trust with the children. The ECEC teachers empathized with their students. The results suggest that there is an underlying positive attitude among ECEC teachers who trust their children when they believe in their children's potential and who accept those children as they are. This attitude among ECEC teachers would appear to be a significant characteristic in Japanese child care.

Key words: Trust, Various involvements, Empathy, Acceptance, Belief

キーワード：信頼感，多様な関わり，共感，受容，信じる

I 問題と目的

近年、教育現場における不登校や学級崩壊など様々な問題が出現するなか、子どもと日々関わる教師の存在の重要性が注目され、「重要な他者」との間に基本的信頼感 (Erikson, 1963) を形成している生徒は、高いストレス状況に置かれても、健全な学校生活を送ることができることが指摘されるように (酒井ら, 2002)、教師と子ども (生徒) の関係、とりわけ、信頼関係に着目した研究が取り上げられる。

従来、信頼関係に関する調査は、信頼される教師側の特性である教師の「信頼性」について関心をもたれてきたが、最近では、生徒側の要因である、生徒の教師に対する「信頼感」に関する研究が注目されている。実際に、学校へ適応するために、教師との関係が影響することが報告されており (大久保, 2005)、生徒か

ら重要な他者への信頼が学校適応には重要であることが示されている (中本ら, 2007)。

中学生の教師に対する信頼感について調査した、中井・庄司による一連の研究においては、生徒の教師に対する信頼感尺度を作成して、「安心感」、「不信」、「正当性」の3つの尺度があることを明らかにしている (2006)。そして、生徒の教師に対する信頼感には、生徒の幼少期における両親への愛着といった生徒側の心理的な要因も関連していること (2007)、過去の教師との関わり経験が、現在の生徒の教師に対する信頼感に影響することを示し、従来指摘されてきた教師の指導態度・指導行動といった教師側の特性である信頼性の側面だけではなく、生徒の保護者や過去の教師にも関連した生徒の心理的要因が影響している可能性について明らかにしている (2009)。

船越 (2010) は、他者との信頼関係を経験してこな

1) 洗足こども短期大学

かった子どもの存在を指摘し、集団に関わる前提として、他者に対する「根拠のない信頼」を獲得していることが重要であることを提唱している。また、「根拠のない信頼」を獲得していない子どもには、他者への信頼関係を教え、育てていくことが必要であることを主張し、「根拠のない信頼」を育てるためには、第一に、他者に対する「根拠のある信頼」関係を結んでいくこと、具体的には、この先生なら大丈夫という安全・安心・安定の関係を紡いでいくことを示している。また、福島(1999)も、本来の自分の感情を素直に表現できなかったり、大人の意に添うことを余儀なくされていたり、情緒が不安定だったりする幼児の姿について、「生きる力」の土台となる「人への信頼感」が育まれていないことを指摘しており、子どもが先生を信頼することができる経験をもつことは重要と考える。

子どもは信頼できる先生をいつ頃から認識するのだろうか、天貝(1999)による幼稚園児を対象に面接法を用いて調査した結果、年少期において「信頼できる人」の理解が、そして、年中期から年長期にかけて「信頼できない人」の理解が進んでいくことを示唆しており、子どもが最初に出逢う先生である保育者に対する信頼感は、中井・庄司(2009)が指摘するように、小学校以降に出逢う先生への信頼感にも影響する重要なものである。

実際に幼稚園や保育所における保育者は、子どもとの信頼関係を築くことを重要視しており、保育者が信頼関係を基盤に保育を行うことは前提として提示されている。例えば、幼稚園教育要領(2009)では、「教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする」と記され、また、保育所保育指針(2009)においても、「一人一人の子どもの気持ちを受容し、共感しながら、子どもとの継続的な信頼関係を築いていく」「保育士等との信頼関係を基盤に、一人一人の子どもが主体的に活動し、自発性や探索意欲などを高めるとともに、自分への自信を持つことができるよう成長の過程を見守り、適切に働きかける」ことが記されていて、保育者にとって子どもと信頼関係を築くことは日々の課題である。このように保育者が子どもとの間に十分な信頼関係を築くことが明記されていることについて、これまでの保育実践において不十分であったのではないかと指摘がある(岡田, 1991)。

しかし、福島ら(1999)が、目に見えない信頼感は幼児の姿の中に表れていることを主張しているように、保育者が感じる子どもとの信頼感について注目する必要があることを考える。例えば、手あそびうたを通して、3歳児と保育者の信頼関係を深める方法を報

告した毛塚ら(1999)は、「子どもに『愛してるよ』『好きだよ』という気持ちを、ことばで、スキンシップで伝える」、「3歳児は、家庭での経験の違いや月齢の差が大きいので、一人ひとりの違いに目を向ける。」、「赤ちゃんと幼児の間を揺れる時期なので、保育者の安心基地としての役割が重要」等の子どもへの関わり方や注意する事柄について提示している。鈴木・岩立(2010)は、子どもが自発的にルーティンを学んでいくために、基盤として子どもと保育者との信頼関係の重要性を指摘している。そして、秋田(2012)は、「土台として安心や愛着があり、その上に信頼関係が築かれていくのが基本的な形」であることを唱え、大好きな保育者が他の子どもと遊んでいるのを見て、「自分もやってみよう」とトライする事例を挙げて、保育者と子どもの信頼関係が遊びの世界を広げていく例を示している。また、このように子どもの遊びが広がり、「明日も園に来たい」という期待がさらに高まる様子について、園そのものへの信頼の第一歩になることを示唆している。

ここでは、前述した子どもからの信頼感が重要であることと同様に、保育者が感じる子どもからの信頼感も重要であることを推察できる。なぜなら、保育者の子どもとのとらえ方が変化したことで子どもに対する保育者の関わり方が変化したことが報告(2011, 丹葉ら)されているように、保育者が子どもに働きかけるときに保育者が感じるところの子どもからの信頼感と保育者が感じるところの子どもに対する信頼感が重要な役割を果たすと考えるからである。本研究は、保育者の視点から子どもとの信頼感をどのようにとらえているのかについて着目し、保育のあり方について検討するものである。

II 方法

調査対象者：関東圏内ある公立の女性幼稚園教諭10名と女性保育士10名。年齢と保育歴は表1に示す。調査の依頼に際しては、倫理的配慮に基づき調査の説明を行い、調査研究協力に関する同意書に署名を書いてもらい同意を得た。

調査期間：2013年7月～2013年9月。

データ収集方法：半構造化面接法を用い、調査対象者の了解を得てICレコーダーに録音した。インタビュー実施時間は30分～1時間程度であった。

半構造化面接の調査内容：次の項目について、調査対象者に質問を実施した。①基本情報(年齢、保育歴)、②子どもと信頼関係が築けた瞬間のエピソード、③子どもが保育者のことを信頼した理由、④子どもから信

表1：対象者一覧

幼稚園教諭			保育士		
ID	年齢	保育歴	ID	年齢	保育歴
A	40代	22	K	60代	41
B	50代	31	L	40代	26
C	40代	25	M	50代	37
D	40代	28	N	40代	24
E	40代	20	O	30代	14
F	40代	22	P	50代	39
G	40代	26	Q	40代	26
H	50代	33	R	50代	30
I	40代	21	S	60代	40
J	50代	32	T	50代	30

頼られるために努力したこと、⑤子どもを信頼することの意味、の5項目である。

Ⅲ 結果

最初に、IC レコーダーの情報から逐語録を作成し、次に、質問項目による回答ごとに記録を整理した。

1 「子どもと信頼関係が築けた瞬間のエピソード」について

質問項目②「子どもと信頼関係が築けた瞬間のエピソードと理由」の分析手続きは、語りの中で、具体的な子どもの姿が語られている発言を抜き取り、結果をシートに整理した。さらに、この整理した発言シートの内容を読み取り、子どもの姿の特徴部分を抜き取ってカテゴリーを作成した。

結果、7つのカテゴリー、「保育者の存在を意識 (No1)」「保育者の言葉や想いを受け止める (No2)」、「保育者に発言する (No3)」、「保育者の助けを求める (No4)」、「保育者に体を寄せる (No5)」、「新たな姿を見せる (No6)」、「気持ちが通じ合う (No7)」に分類された (表2)。それぞれに、「保育者の存在を意識 (No1)」は、子どもが保育者の存在を受け入れ意識し、子ども自身が安定したり、安定してさらに次に進んだりする姿、「保育者の言葉や想いを受け止める (No2)」は、子どもが保育者の言葉や想いを受け止めたり、想いを受け入れたりする姿、「保育者に発言する (No3)」は、子どもが保育者に話しかけたり自分の考えを伝えたりする姿、「保育者の助けを求める (No4)」は、困ったときに保育者の助けを求める姿、「保育者に体を寄せる (No5)」は、子どもが保育者に接近したり保育者の膝の上にいる等の体に触れたりする姿、「新たな

表2：子どもの姿による7種のカテゴリー

ID	カテゴリー	No1	No2	No3	No4	No5	No6	No7
	A	○	—	—	—	—	—	—
B	○	—	○	—	—	—	—	—
C	○	—	○	—	—	—	○	—
D	—	○	○	○	○	○	—	○
E	—	—	○	—	○	○	○	○
F	—	—	○	○	○	○	○	—
G	—	—	○	○	○	—	—	—
H	○	—	○	—	—	—	—	○
I	○	—	—	—	—	—	○	○
J	○	—	○	—	—	—	—	—
K	○	○	○	—	—	—	—	○
L	○	—	—	○	○	—	—	—
M	—	○	○	—	○	—	○	○
N	○	—	○	—	○	○	○	○
O	—	—	○	○	○	—	—	—
P	—	—	○	—	—	○	—	—
Q	—	○	—	—	—	—	—	○
R	—	—	○	—	○	—	—	○
S	○	○	—	○	—	—	—	○
T	○	○	—	—	—	—	—	○

(No1.「保育者の存在を意識」、No2.「保育者の言葉や想いを受け止める」、No3.「保育者に発言する」、No4.「保育者の助けを求める」、No5.「保育者に体を寄せる」、No6.「新たな姿を見せる」、No7.「気持ちが通じ合う」)

姿を見せる (No6)」は、これまで見せていなかった自分の新しい姿を保育者に見せる姿、「気持ちが通じ合う (No7)」は、保育者に対する応答的な関わりがみられ、保育者と子どもの気持ちが通じ合い繋がる感覚をもたらす姿の意味を示すものである。

(1) カテゴリー「保育者の存在を意識 (No1)」と「気持ちが通じ合う (No7)」を示すインタビュー内容

表3：インタビューA

「なんかずーっと泣いて朝とか通ってきていた子が、その子は5月から入ってきた子なんですね、・・・ (略)・・・、泣いてた人がそれこそさっきも言ったみたいに、遠くにいるんだけど、「(子どもが) これやってもいいの〜?」「(私が) いいよ〜」「(子どもが) はーい」みたいに、なんかスツと自分の好きな遊びを選んで遊ぶようになって(1)、それまではやっぱりワーッと泣くとそのまま、抱っこするとかおんぶして、もう連れて行くとか手をつないでずーっと一緒にいるみたいな感じだったんですけど、そういう風にやらなくても遠くにいるんだけど

「『いいよー』みたいにやったら、遊び始めたって(1)、本当に簡単な姿だったんですけど、で、まあ『できたものを見せてね』って言ったらブロックで作ったものを見せに来てくれた(2)って感じですかね。」

例えば、インタビューAの内容(表3)において、下線部分は保育者が子どもと信頼関係が築けたと感じる前の内容で、波線部分は保育者が子どもと信頼関係が築けたと感じた瞬間の内容である。「(保育者が)遠くにいるんだけど『いいよー』みたいにやったら、自分の好きな遊びを選んで遊べるようになった(1)」という子どもの姿は、子どもが保育者の存在を意識し、安定して自分の好きな遊びをできるようになったものであり、カテゴリ「保育者の存在を意識(No1)」に分類された。また、『『できたものを見せてね』って言ったらブロックで作ったものを見せて来てくれた(2)』は、保育者の働きかけに子どもが応えて、保育者と子どもの気持ちが通じ合い繋がる感覚をもたらす姿を示すもので、「気持ちが通じ合う(No7)」に分類された。

- (2) カテゴリ「保育者の言葉や想いを受け止める(No2)」「保育者に発言する(No3)」「保育者の助けを求める(No4)」「保育者に体を寄せる(No5)」「気持ちが通じ合う(No7)」を示すインタビュー内容

表4: インタビューD

信頼関係が築けると、やっぱりこっちが真剣になっていけないことを注意すると、やっぱりちゃんと受け止めてくれて、叱っても嫌いにはならないっていうのかな(1)。難しいんだけど、そうだから、ちゃんとこちらの気持ちを受け止めてくれてるなって思ったとき(1)に、あ、信頼関係ができてから、これだけ言っても大丈夫なんだなっていうのはありましたよね。・・・(略)・・・3歳なんかほとんど4月の入園当初なんか泣いて、ママと離れたくないって泣いて来るんだけど、やっぱりそこで、「先生と一緒に手を繋いで、お部屋に行こう」って言うと、まあ、それでも「嫌～」って言う子もいますが、でも、段々に、私の方に手を差し伸べてきたり(2)、手を繋いでも払いのけないで、ぎゅっと握り返してくれたり(3)、そういうのを一つの信頼関係かなっていう気がするんです。・・・(略)・・・信頼関係をもつてると、「うん、あのね、こうでね、こうでね・・・」っていう風にいろいろ理由を話してくれたり(4)・・・(略)・・・困ったことがあると相談をしてくれたり(5)とか、・・・(略)・・・。

同様に、インタビューDの内容(表4)では、下線部分は保育者が子どもと信頼関係が築けたと感じる前の内容で、波線部分は保育者が子どもと信頼関係が築けたと感じた瞬間の内容である。「保育者が子どもに真剣になっていけないことを注意すると、やっぱりちゃんと受け止めてくれて、叱っても嫌いにはならない。ちゃんとこちら(保育者)の気持ちを受け止めてくれてると思った。(1)」は、子どもが保育者の言葉や想いを受け止める姿であり、カテゴリ「保育者の言葉や想いを受け止める(No2)」に分類された。「ママと離れたくない子どもが、段々に、私(保育者)の方に手を差し伸べてきた(2)」は、子どもが徐々に保育者に慣れて接近する姿であり、カテゴリ「保育者に体を寄せる(No5)」に分類された。「手を繋いでも払いのけないで、ぎゅっと握り返してくれた。(3)」は、子どもと手を繋ごうとする保育者に対して子どもが手を握り返して応答的に関わる行為であり、保育者と子どもの気持ちが通じ合い繋がる感覚をもたらす姿を示し、カテゴリ「気持ちが通じ合う(No7)」に分類された。『『うん、あのね、こうでね、こうでね・・・』っていう風にいろいろ理由を話してくれた(4)』は、子どもから自分の想いを保育者に伝える姿で、カテゴリ「保育者に発言する(No3)」に分類された。「困ったことがあると相談をしてくれた(5)」は、子どもが困ったときに保育者の助けを求める姿であり、カテゴリ「保育者の助けを求める(No4)」に分類された。

- (3) カテゴリ「保育者に発言する(No3)」「新たな姿を見せる(No6)」を示すインタビュー内容

表5: インタビューP

例えば、しがみついて泣いて、自分の想いを子どもが言ってくるとき(1)にね、そういう時に、いろんな先生がいる中で、自分だったんだなって。自分のところに飛んできてくれたんだなって。とか、自分を出せない子どもが自分を出してきたとき(2)とかね、そういう時に、ああこの子とは結ばれてるなって感じますね。

同様に、インタビューPの内容(表5)では、下線部分は保育者が子どもと信頼関係が築けたと感じる前の内容で、波線部分は保育者が子どもと信頼関係が築けたと感じた瞬間の内容である。「しがみついて泣いて、自分の想いを子どもが言ってくる(1)」は、子どもが保育者に自分の想いを伝える姿であり、カテゴリ「保育者に発言する(No3)」に分類された。「これまで自分を出せなかった子どもが、自分を出してきた(2)」は、これまで見せていなかった子どもの新し

い姿を保育者に見せる姿であり、カテゴリー「新たな姿を見せる (No6)」に分類された。

以上より、保育者が語る「子どもと信頼関係が築けた瞬間のエピソード」の子どもの姿は、「保育者の存在を意識 (No1)」、「保育者の言葉や想いを受け止める (No2)」、「保育者に発言する (No3)」、「保育者の助けを求める (No4)」、「保育者に体を寄せる (No5)」、「新たな姿を見せる (No6)」、「気持ちを通じ合う (No7)」の7つのカテゴリーに分類され、幼稚園教諭と保育士の両者の発言には、全てのカテゴリーがみられた。保育者は子どもの言葉や行為の変化を明確に把握し、以前とは異なる自分と子どもとの関係性から、子どもと信頼関係が築けたことを感じていることがわかった。

2 「子どもが保育者のことを信頼した理由」について

質問項目③「子どもが保育者のことを信頼した理由」の分析手続きは、語りの中からキーとなる発言を抜き取り、シートに整理した。さらに、この整理した発言シートの内容を読み取り、類似する内容からキーワードを選出して整理した。結果、「共感する (No1)」、「子ども理解 (No2)」、「認める・許容する (No3)」、「受け止める (No4)」、「心地いい空間・安心感 (No5)」、「子どもに歩み寄る身近な存在 (No6)」、「子どもを信

頼する (No7)」、「愛情をもつ (No8)」の8つのキーワードと、これら以外で示される「その他」に作成された(表6)。

この8つのキーワードの内、具体的に、「子ども理解 (No2)」、「認める・許容する (No3)」、「子どもに歩み寄る身近な存在 (No6)」が含まれる発言 (ID:A) は、「身近に感じてもらって (No6)、『この先生、なんかわかってくれるな』みたいな (No2)、例えば認めるとか、『○○ちゃん、そういうところすごいね、私にはできないは』とか『○○ちゃんがそうやってくれたから助かった』とか (No3)、子どもと大人というより対人間で私はいたい (その他)」でみられた。また、「共感する (No1)」、「心地いい空間・安心感 (No5)」が含まれる発言 (ID:D) は、「トラブルや困ったことがあって泣いている子に対応するとき、その子の気持ちになって想いに共感したり (No1)、私はあなたの味方だから何でも話してという安心感を与えたりする (No5)」ことで『この人に心を許してもいいんだな』って子どもたちも思ってくれると思う」でみられた。次に、「子どもを信頼する (No7)」を含む発言 (ID:I) は、「子どもを信頼したから (No7)。信頼してなかったら、保育の際に一ヶ所に座れない。任せているという意味 (その他)」。もし、怪我や何かを壊すことがあったとして

表6：子どもが保育者のことを信頼した理由

	No1	No2	No3	No4	No5	No6	No7	No8	その他
A		○	○			○			対人間でいる。
B		○							
C						○			約束は守る。子どもの想いを実現できるようにする。
D	○				○				笑顔。子ども目線になる。
E	○		○	○					声をかける。子どものサインをキャッチする。
F				○					
G					○				子どもを気にする。声をかける。大丈夫と働きかける。
H	○	○	○						
I							○		保育者の責任で任せる。保育者が本気で関わる。
J		○	○	○	○				
K	○	○							
L	○			○					
M	○				○			○	母親(家族)も含めて居心地よくすることを日々積み重ねている。
N	○	○	○	○	○		○		
O				○	○				子どもの要求に応える。
P								○	
Q								○	いつもは楽しく優しい、悪いことした時には怒る。「見てる」を伝える。
R								○	「この子にとって一番良いこと」を考え接する。偏らない心で接する。
S				○					一緒に遊ぶ。新しいことを取り入れる。意見を聞く。謝る。保護者と仲良くする。
T	○								苦楽を共にする。保育所での仮のお母さんに近づく。

(No1. 「共感する」、No2. 「子ども理解」、No3. 「認める・許容する」、No4. 「受け止める」、No5. 「心地いい空間・安心感」、No6. 「子どもに歩み寄る身近な存在」、No7. 「子どもを信頼する」、No8. 「愛情をもつ」)

も、私の責任なので好きにやりなさいとメッセージを送っている。大人が本気かどうか子どもは見ている、口先だけか本気なのか（「その他」。）でみられ、「共感する（No1）」、「受け止める（No4）」を含む発言（ID：L）は、「子どもが求めるものを受け止めたり聞いたげたり・・・日々、子どもが『こうして欲しい、ああして欲しい』っていうのを聞いたりして（No4）、共に一緒に楽しいことを経験して共感し合ってた遊んできた（No1）。」でみられ、「愛情をもつ（No8）」を含む発言（ID：

P）は、「気持ちを通じたというか、愛情を感じてもらえたのかなと思う（No8）。」でみられた。これらのキーワードに共通することは、子どもを決して否定することなく、子どもの心に寄り添い、考えて関わろうとする保育者の姿勢であった。このような受容・共感しながら子ども理解を深めて関わる保育者の姿が子どもに伝わり、子どもが保育者のことを信頼したと、保育者は感じていることがわかった。

表 7-1 子どもから信頼されるために努力したこと

	No1	No2	No2-1	No2-2	No2-3	No2-4	No2-5	No2-6	No2-7	No2-8	No2-9
A		○					○				
B	○										○
C		○		○			○				○
D	○	○	○	○					○		○
E	○	○	○			○			○		○
F		○			○		○	○		○	
G		○			○	○		○			○
H	○	○							○		○
I		○									○
J	○	○	○								○
K		○									○
L	○	○									○
M	○	○	○								○
N	○	○									○
O		○						○			○
P		○									○
Q		○								○	○
R	○	○									○
S		○									○
T	○	○	○						○		○

(No1. 「内面理解」、No2. 「関わる・声をかける」、No2-1. 「笑顔」、No2-2. 「名前を呼ぶ」、No2-3. 「遊ぶ」、No2-4. 「スキンシップ」、No2-5. 「約束を守る」、No2-6. 「困ったときの対応」、No2-7. 「子ども目線」、No2-8. 「子どもに謝る」、No2-9. 「その他」)

表 7-2 子どもから信頼されるために努力したこと

No2-9 (その他)
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の性格を踏まえて一步引く(B) ・一日に1回は声をかける(C) ・安心感を与える。見てるというメッセージを伝える。一人一人に合わせて声をかける(D) ・心を穏やかにして、ありのままの子どもを受け止めるようにする(E) ・楽しいことを頼むと楽しいことができるような時間を設ける(G) ・愛していることを伝えて注意をする。子どものバックグラウンドまで理解して伝える。保育者の気持ちも伝え、子どもの気持ちも受け止める。一人一人を理解して、注意するときに話し方は変える(H) ・担任として1人もこぼさないように考えて関わる。全員が満足でき、意欲的に取り組み達成感を味わえるように関わる(I) ・仲良くなる。否定的に見ていないことが伝わるように接する。認める言葉を言う。楽しい気持ちで帰られるようにする。一緒に同じものを見て話し合う。気持ちを引き出す。共感する。無理に叱らない(J) ・一人一人を大事にする。些細なことも認めて「さすがだね」をよく発言する(K) ・子どもが楽しいと思うことを経験できるように考えて実践している(L) ・叱るときはきちんと叱り、叱った後に抱きしめてフォローする(M) ・子どものことを知り、私のことも知ってもらうために積極的に関わる、コミュニケーションとる(その子の情報収集をする：好きなもの、食べ物など)(N) ・子ども目線で、子どもが伝えたいことは何かを考え、接する(O) ・誰にも公平、どの子にも公平(P) ・子どもの声に応える(呼びかけ、したいこと)。できないなら理由を伝える。注意しても好きは変わらないことを伝える。子どもを批判するのではなく行動を止める言い方を心掛ける(Q) ・その子の背景は必ず頭に入れ(保育時間、家族、好きなもの等)、その子を伸ばすために必要な関わり方をする(R) ・自分がマンネリにならないように研修に出る。保護者と話をし、見ていたことが子どもに伝わるようにする(S) ・子どもたちの好きなものをリサーチする。流行など子どもの興味・関心をもって、そこから遊びに繋げていく(T)

3 「子どもから信頼されるために努力したこと」について

質問項目④「子どもから信頼されるために努力したこと」の分析手続きは、語りの中からキーとなる発言を抜き取り、シートに整理した。さらに、この整理した発言シートの内容を読み取り、類似する内容を整理した。結果、保育者が子どもの気持ちを理解することを示す「内面理解 (No1)」、保育者が子どもへ関わることや何らかの声かけをすることを示す「関わる・声をかける (No2)」の2つのカテゴリーが出現した。また、保育者による子どもへの関わり方や声のかけ方については、さらに細かく様々な内容があることを整理すると、「笑顔 (No2-1)」、「名前を呼ぶ (No2-2)」、「遊ぶ (No2-3)」、「スキンシップ (No2-4)」、「約束を守る (No2-5)」、「困ったときの対応 (No2-6)」、「子ども目線 (No2-7)」、「子どもに謝る (No2-8)」の8つのキーワードが出現し、この8つのキーワード以外の内容は、「そ

他 (No2-9)」として作成された (表 7-1, 表 7-2)。

保育者が子どもから信頼されるために努力していることとは、子どもの気持ち理解、子どもへの関わり方や声かけに関する内容であり、特に子どもへの関わり方や声かけに関しては、全ての保育者が当てはまる内容を発言していることから、多くの保育者が子どもから信頼されるために努力している内容であることがわかった。さらに、保育者の子どもに対する関わり方や声のかけ方は多様であり、具体的に示された内容である、「笑顔で接する (No2-1)」、「なるべくその子の名前を呼ぶ (No2-2)」、「一緒に遊ぼうと誘う (No2-3)」、「手や身体に触れながら言葉をかける (No2-4)」、「約束や言ったことは守る (No2-5)」、「困っている様子であれば声をかける、手助けする (No2-6)」、「子どもと同じ目線になって伝えたいことを考えて接する (No2-7)」、「失敗したときは謝る (No2-8)」の他にも、保育者が自分を振り返って、「自分の性格を踏まえて

表 8 子どもを信頼することの意味

	No1	No2	No3	発言内容
A				対人間として関わる。子どもたちの人間性を分かたうえで子どもだからという垣根を越えてぶつかっていける、入り込んでいける。伝わる。
B				大人が環境を整えることで子どもが自分を出せる学びができる。
C	○		○	丸ごとその子を受け止め、その子自体を信じる、信頼する。
D		○	○	子どもを信じて任すことができ、安心して子どもの行為をみていられる。
E	○		○	ありのままの自分を出してもいいと思えるように子どもを受け止めること。子どもを信頼している。
F	○			その子をありのまま受け止めること。
G		○		「あなたは大丈夫、できるよ」と、子どもに任せることができる (保育者が少し離れていても大丈夫)。
H			○	どの子もみんな良いところ素晴らしいもの、可能性をもっている (生きる力がある) ことを信じている。
I			○	子どもを信頼することがスタートで、子どもを信頼しないと何も積みあがっていかない、保育ができない。
J	○		○	悪いことをするようなことがあっても原因、理由があり、その子自身が不信に値する人ではない。子ども自身を信頼している (受け入れる)。
K	○	○		そのままでもいい、自然体でいいこと。困ったことがあったら言ってという姿勢で任せることができる。ありのままを見守ることができる。
L			○	子どもを信じ、子どものもつ力を見守る。
M	○		○	子どもの行動の一つ一つには意味があるので、子ども自身を否定することはないし信頼する。良いところをいっぱいもっていて、それを伸ばす。
N			○	子どもを信じること、向き合うこと。
O	○			ありのままの子どもを見て子どもと私に絆ができてくること。
P	○		○	1人の人間としてみる。信じることから始めないと信じてもらえない。「大丈夫」「先生がついている」という安心感を与える。子どもを受け入れること。
Q			○	子どもはすごく不思議な力がある。信頼すると頑張る。保育者が信頼すると、子どもはそれに応える。子どもたちはやってくれるという信頼がある。信頼すると人間として伸びる、心が伸びる。
R		○	○	その子の個を一人のその人としての人格を認める。自分が認めない限り、信頼は得られない。子どもを信頼するところから。
S		○		信頼することは、その子と認めること、子どもの存在を認める。これからしようとすることも認める。でも、困った時は手を貸すという姿勢。
T			○	子どもの可能性を大事にすること。子どもが伸びていく、この伸びしろを信じる。

(No1. 「受け止める」、No2. 「任す・認める」、No3. 「信じる」)

一歩引く (ID:B) や「心を穏やかにして、ありのままの子どもを受け止める (ID:E)」など、保育者が様々な子どもに対する接し方をしていることがわかった。

4 「子どもを信頼することの意味」について

質問項目⑤「子どもを信頼することの意味」の分析手続きは、語りの中からキーとなる発言を抜き取り、シートに整理した。さらに、この整理した発言シートの内容を読み取り類似する内容を整理した結果、3つのキーワードが選出された。それぞれに、「丸ごとその子を受け止める (ID:C)」、「その子をありのまま受け止める (ID:F)」といった内容を示す「受け止める (No1)」、「子どもを信じて任すことができ、安心して子どもの行為をみていられる (ID:D)」、「『あなたは大丈夫、できるよ』と子どもに任せることができる (保育者が少し離れていても大丈夫) (ID:G)」、「その子の個を一人のその人としての人格を認める (ID:R)」といった内容を示す「任す・認める (No2)」、「その子自体を信じる (ID:C)」、「子どもを信じ、子どものもつ力を見守る (ID:L)」、「信じることから始めないと信じてもらえない (ID:P)」といった内容を示す「信じる (No3)」が作成された(表8)。ここでは保育者にとって子どもを信頼するとは、子どものありのままの姿を尊重し、子どもや子どもの可能性を信じて任すことができるし、全てを受け止めるという保育者の姿勢であることがわかった。

IV 総合考察

本研究では、保育者の視点から子どもとの信頼感をどのようにとらえているかについて着目したが、保育者は子どもの言葉や行為の変化を明確に把握し、子どもと信頼関係を築けたことを感じている。また、信頼関係を築くためには、子どもの心に寄り添う姿勢で子どもを理解し、一人一人に合う関わりを試みている。これらは相互に関連するものであろう。保育者が状況や個を考慮して関わるから子どもの姿に変化がみられるのであり、子どもの姿から保育者は子どもへの関わり方を決定していくのである。ここでは、保育者が子どもの気持ちを理解しようとする受容と共感の姿勢が備わる。受容と共感に関して、寺見(1997)が、「相手に受容された、共感をしあえた実感は、いまその子が求めていることを感受し、内容や程度の善し悪しを知的に判断して処理することなく、感じ取ったままを満たすというかかわりの中ではじめて、持たせることができる」と指摘し、さらに、「受容とは、子どもがその時おかれた内面に共感的にかかわる過程である。

その受容過程は、保育者が自分の枠組に気づき、それを子どもとの相互作用を通して変容させていくという保育者側の自己変容の過程」と示しているように、保育者が子どもと信頼関係を築くまでには様々な関わりを試みたことであろう。そのためには、既存の価値判断を置いて、子どもが感じているものを保育者自身が感受し、自分の枠組を超えて自己変容しながら子どもが感じるものを常に掴もうとする保育者の姿勢が、子どもに対する多様な関わりに繋がるのが考えられる。

そして、子どもに対する多様な関わりを保育者が続けることができる背景には、「信じる」姿勢があるのではないだろうか。「信じる」について、原田(2004)は、「子どもを信じるとは本当に難しいことだと感じている。なぜなら、その子を信じるためには、その子のよさや可能性を感じられなければならないからだ。」と示しており、「子どもを闇雲に信じるのではなく、ありのままのその子を見つめ、その子のよさや可能性を感じられるからこそ信じられる」ことを指摘している。同じように保育者の発言からは(表8:下線部)、「丸ごとその子を受け止める (ID:C)」、「ありのままの自分を出してもいいと思えるように子どもを受けとめる (ID:E)」といった、子ども自身を否定することなく受けとめ、わかろうとする保育者の姿勢や、「子どもを信頼する (ID:I)」、「子どもを信じ、子どものもつ力を見守る (ID:L)」といった、子ども自身や子どもの可能性を信じる姿勢がみられる。原田(2004)が難しいと指摘する内容が保育者の発言でみられるのは、14年以上の比較的に長い保育歴をもつ保育者が対象であったからかもしれないが、保育者の子どもや子どもの可能性を信じる姿勢が、子どもへの多様な関わりを諦めずに続けることを可能にしているのではないかと考える。信じるとは目に見えないものであるが、揺るがない心で一貫して子どもに関わり続ける保育者の態度に繋がるのである。

保育者が子どもの心に寄り添い、子どもを理解して多様に関わる姿について、鯨岡(2000)は、「子どもが未熟で、いまだ共通の媒体を獲得していなくとも、関わる大人の側が子どものことを分かろうと努めている限り、そこには何らかの通じ合い、分かり合いが見られ、最初の誕生日頃ともなれば、その種の感性的コミュニケーションによって、かなりのレベルでの『分かり合い』が可能になります。」と述べ、橋川ら(2004)も「大人の側が子どものことを分かろうと努める限り、『分かり合い』は可能になる」ことを指摘しているように、保育者が子どものことを分かろうとして関わり続けた結果に現れた子どもの言葉や行為の変化は、保

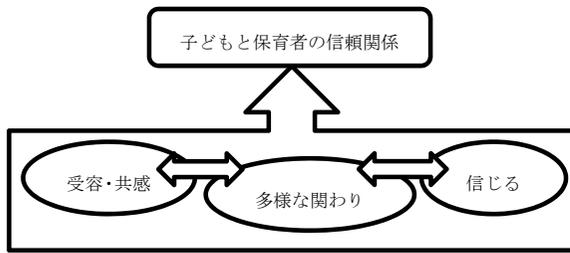


図1: 保育者がとらえる子どもとの信頼感

育者と子どもの「分かり合い」、「通じ合い」を示し、保育者は子どもと信頼関係を築けたことを、子どもの姿の変化から敏感に感じ取っていることが示唆される(図1)。

このような保育者がとらえる子どもとの信頼感は、保育者の子どもに対する態度に現れ、それは、信頼関係を築いた子どもの姿にも現れていることがわかる。具体的には、「受容・共感のなかで自己変容しながら多様に子どもと関わる」保育者の態度であり、「子どもが保育者の存在を受け入れ意識し、子ども自身が安定したり、安定してさらに次に進んだりする」、「子どもが保育者の言葉を聞いて受け入れたり、想いを受け入れたりする」、「子どもが保育者に話しかけたり自分の考えを伝えたりする」、「困ったときに保育者の助けを求める」、「子どもが保育者に接近したり保育者の膝の上に乗る等の保育者の体に触れたりする」、「これまで見せていなかった自分の新しい姿を保育者に見せる」、「保育者に対する応答的な関わりがみられ、保育者と子どもの気持ちを通じ合い繋がる感覚をもたらす」といった子どもの姿である。これらの子どもの姿は、子どもが家庭を離れ、社会生活を初めて経験する園に適応するためには必要な姿であったらう。幼稚園教諭と保育士の両者において偏りなく、7種の全てのカテゴリー内容が出現したことからも、園生活を始めるにあたり、親(家族)以外の他者との関わりを経験するうえで必要な姿であったのではないかと考えられる。専門的な知識と技術をもつ保育者であるから、子どもの発達を見通して、今、どのような子どもの姿がみられることが相応しいかととらえて、多様な関わりができることが窺える。

子どもと信頼関係を築くための保育者による多様な子どもへの関わりは、日本の保育の特徴といえるものかもしれない。Susan D(2004)による、32か所の幼稚園・保育園でのフィールドワークに基づき、優れたプログラムの条件を4つの原則としてまとめた1つに、「よいプログラムに携わる教職員は活気に満ち、子どもた

ちのために懸命に働く」と挙げられ、座って子どもたちをただ見ていることの皆無や無駄話がほとんどない状態で、保育者が積極的に子どもたちと関わる姿を日本の保育の特徴と示す内容に一致している。また、日本の保育が個人の経験だけではない、もっと別の高度な知識や技術が必要であることを認識された熱心な教育として位置づけされているように、日本の保育は海外に比較してより専門的で独自の保育を展開していることを主張できるのかもしれない。

V 今後の課題

本研究は、保育者の視点による信頼感のとらえ方が子どもに対する関わりや信頼関係を築けた子どもの姿に現われることを示唆するものであった。

今後には検討すべき課題において、信頼関係を築けたことによる子どもの姿に変化があることが明確になり、その内容は7つの種類で出現したものの、このとらえ方ととらえ方に対する関わり方について詳しく検討する必要があることを考える。そして、保育者がとらえる子どもの姿においては、課題に気づきやすい子どもとそうでない子どもがいるかもしれない。例えば、一見、課題がないと思われるような、いわゆる扱いやすい子どものなかに見落としている課題はないか。保育者がとらえる子どもの姿を具体的に検討していく必要を感じる。

また、今回の結果を踏まえ、さらに次の4つの研究について、進める必要があることを挙げる。①信頼関係が築けたことによる子どもや保育に対する変化。②信頼感のとらえ方は保育歴によって異なるのか。③保育者の子どもに対する信頼感、保育者自身が「根拠のない信頼」を獲得していることに関係するか。④「子どもとの信頼感」に対する日本と海外の比較。

<引用文献>

- 秋田喜代美 子どもの力を引き出す園での信頼関係「これからの幼児教育」Benesse 次世代育成研究所 2012 p2-3
- 天貝由美子 幼児期における信頼感の発達-信頼できる人・信頼できない人の理解の観点から- 日本教育心理学会総会発表論文集 41, 1999 p426
- 大久保智生 青年の学校への適応感とその規定要因-青年用適応感尺度の作成と学校別の検討- 教育心理学研究 53, 2005 p307-319
- 岡田正章 幼児に信頼される保育者「幼児の教育 90(2)」 日本幼稚園協会 1991 p4-5

鯨岡峻 養護学校は、いま - 重い障害のある子どもたちと教師のコミュニケーション ミネルヴァ書房 2000 p19-20

毛塚陽子・木目田芳美・林美保・二階堂邦子 手あそびうたの研究Ⅶ - 手あそびうたを通して、3歳児と信頼関係を深める試み - 日本保育学会大会研究論文集 52, 1999 p306-307

厚生労働省保育所保育指針解説書(株) フレーベル館 2009 p63-64, 228

酒井厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究 50, 2002 p12-22

鈴木幸子・岩立京子 幼稚園の帰りのあいさつ場面におけるルーティン生成の過程 - 3歳児の分析から - 保育学研究 48(2), 2010 p180-191

Susan D.Holloway (訳) 高橋登・南雅彦・砂上史子 ヨウチエン 北大路書房 2004 p206-207

丹葉寛之・大西満・尾藤祥子 「気になる子ども」を捉える思考プロセスの形成 - 保育士に行った間接的支援の実践報告 - 藍野学院紀要 25, 2011 p29-36

寺見陽子 保育者のかかわりと子どもの育ちに関する事例的研究(Ⅰ) - 気になる子どもに対する保育者の心持ちと子どもを受容する過程 - 神戸親和女子大学児童教育学研究 16, 1997 p114-133

中井大介・庄司一子 中学生の教師に対する信頼感とその規定要因 教育心理学研究 54, 2006 p453-463

中井大介・庄司一子 中学生の教師に対する信頼感と幼少期の父親および母親への愛着との関連 パーソナリティ研究 15(3), 2007 p323-334

中井大介・庄司一子 中学生の教師に対する信頼感と

過去の教師との関わり経験との関連 教育心理学研究 57, 2009 p49-61

中本浩揮・森司朗・屋良朝栄 高校生における教師に対する信頼感と学校適応感の関係 鹿屋体育大学学術研究紀要 35, 2007 p1-13

橋川喜代美・岩崎美智子・塩路晶子・小林友子 子どもの“こだわり”に寄り添う保育に貫かれる子ども理解と受容 鳴門教育大学学校教育実践センター紀要 19, 2004 p35-44

原田正裕 子どもを信じる(Ⅳ 教師おこし編) 研究紀要: 学びをひらく 2003, 2004 p122-125

橋島恭子・渡辺恵理・糸原淳子 人への信頼感を支えるに、自分らしさを表現していく幼児を育てる - ありのままの姿を受け止めていくことから - 日本保育学会大会研究論文集 52, 1999 p320-321

船越勝 他者との信頼関係を経験してこなかった子どもと集団づくり - 「根拠のある信頼」から「根拠のない信頼」へ - 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 20, p2010 85-90

文部科学省 幼稚園教育要領解説(株) フレーベル館 2009 p23, 256

付記

本研究は、“Examination of Feeling of Trust Toward Children for ECEC Teachers” Kaori Okamoto, Takashi Muto ‘The 15th Conference of the Pacific Early Childhood Education Reserch Association(2014)’ において発表したものを再分析し、まとめたものである。